

女子大学生の性役割認知に関する研究

——性役割観の多次元モデルを背景として——

伊 藤 弘 美

女子青年（特に大学生年代）が社会からは女性特性を重視した性役割を期待されていると認知する一方で、自分自身は女性特性を軽視した自己性役割観を持ち、男子に比べると性役割獲得が困難であるということは、これまでいくつかの先行研究で指摘されている。文化・社会的観点からみると、多様な性役割モデルの選択が許されている現在、女子青年にとって性役割獲得の過程は自由でもあり、主流モデル（伝統的女性役割観）が拡散してしまった困難な状態であるとも言える。また発達の観点からみても、男子青年は学校生活でも社会でも一貫して高い達成動機が奨励されるのに比べて、特に大学生年代の女子青年は、学生としての望ましさとは相反するような女性役割特性の受容も求められている。この二重規範も、女子大学生にとって女性役割特性の受容を困難にさせている一因だろう。

ところでこれまで性役割観の測定に用いられてきた性役割スケールは、男性性、女性性が一次元の対極に位置するという仮定に基づく一次元モデルから、別々の次元に属すると考える二次元モデルが主流になってきた。二次元モデルの登場によって、心理学的アンドロジニーを捉えることが可能になったものの、これまでの性役割スケールには「行動」「興味」「能力」など多種のレベルにわたる項目が錯綜して盛り込まれていた。性役割が単一概念ではなく、いくつもの層からなるヒエラルキー構造を持っていることを考えると、多種のレベルに細分化した性役割スケールを作成することが必要だろう。そこで本研究では、小倉（1982）の提唱した8つのレベルからなる多次元モデルを背景とした性役割スケールを作成し、女子大学生の性役割観（自己性役割観と社会から期待される女性役割）を次元ごとに比較検討することを目的の第一とした。

また質問紙調査による先行研究では、初めに述べたように女子大学生は自己性役割観と社会からの性役割期待に大きなずれがあるとされてきた。しかし実際に女子大学生が日常語っている展望では、仕事よりも家庭を重視する者が少なからずおり、性役割スケールによって測られた性役割観と実際の志向性は必ずしも一致しないことも考えられる。そこで、本研究で作成した性役割スケ-

ールを用いて自己性役割観と社会から期待される女性役割のそれぞれについて特徴的なタイプを選出し、このような性役割観を持つ女子大学生がどのような志向性を示すかを投影法調査によって測定することを目的の第二とする。

研究 1

「外見的特性・行動」「情緒性」「活動性」「能力」「興味・関心」「対人行動・社会的行動」「対物認知・認知スタイル」「信念・価値観・固定的態度」の8レベルごとに男性特性語、女性特性語を収集し（予備調査1）、各特性語の性の帰属の妥当性を検討した（予備調査2）。予備調査を経て選定された男性特性42語、女性特性40語は調査GRSとして211名の女子大学生に実施された。調査GRSは“自己性役割観”と“社会から期待される女性役割”の2つの評価次元について、ふさわしさの程度を5件法で評定するものである。調査GRSの全項目について2つの評価次元ごとに因子分析を行なったところ、どちらの評価次元でも、また因子数がいくつでも、男性特性は一つの因子を形成し、女性特性は複数の因子に分かれるというパターンだった。先行研究（柏木、1972）では、女性特性は男性特性に比べて未分化で曖昧な仕方で概念化されていると指摘しているが、女子大学生に限って言えば、自己の性である女性特性はいくつかに分けて捉えられているのに対して、反対性である男性特性は分化していないという傾向が見られた。

そこで男性特性、女性特性それぞれの因子構造を明確にするため、まず2因子指定で因子分析を行なって男性特性因子、女性特性因子に分け、さらに各因子ごとに因子分析を行なった。その結果、自己性役割観では男性特性は『安定性・たくましさ』『能動性・自律性』『知性』の因子からなり、女性特性は『消極性』『あたたかさ』『美しさ』『細やかさ』の因子からなることがわかった。また社会から期待される女性役割では女性特性の『細やかさ』以外は自己性役割観と共通の因子構造を持つことがわかった。以上の分析結果をふまえ、因子負荷量、 α 係数、意味内容を考慮して最終的には、男性特性は『安定性、たくましさ』『能動性、自律性』『知性』次元からなる23項目、女性特性は『消極性』『あたたかさ』

『美しさ』次元からなる19項目をGRスケールとして選定した。

全被験者を対象としてGRスケールの各次元ごとに自己性役割観と社会から期待される女性役割を比較すると、男性特性はどの次元でも社会から期待される以上に自分自身は男性特性を重視しており、先行研究と一致した結果が得られた。しかし従来言われてきた女性特性における自己性役割観と社会から期待される女性役割の大きなずれは『あたたかさ』『美しさ』についてはみられず、『消極性』だけは、社会からは期待されているが自分自身は重視していないというずれが明らかになった。女性特性全体の評価でみるとやはり自分自身の評価は社会から期待されているよりも低いが、『あたたかさ』のようにどちらの評価次元でも高い評価をされる女性特性次元は従来の研究では報告されていない次元である。次に男性特性（女性特性）の尺度得点が平均値 $\pm 1/2\sigma$ 以上のずれがあることを基準として、2つの評価次元ごとにmf型、Mf型、mF型、MF型の4タイプを選出し、各タイプの特徴を検討した。各次元の評価のパターンは被験者全体の傾向と変わりなく、Mf型、MF型は男性特性を高く評価し、mF型、MF型は女性特性を高く評価する傾向がみられた。しかし自己性役割観の『消極性』に関する評価はタイプ間でばらつきがみられ、肯定的評価をしているのはmF型だけであった。また自己性役割観でも社会から期待される女性役割でも、Mf型は『あたたかさ』だけは肯定的な評価をしており、全くの男性志向という訳ではなかった。どのタイプの女子大学生にとっても女性特性の『あたたかさ』だけは重要な次元と言えよう。

研究 2

様々な対象から家庭あるいは仕事を促された場合どのような志向性を示すか、また条件が厳しくても就職を勧められた場合、あるいは条件が厳しければ就職する必要はないと勧められた場合どのような志向性を示すかを投影法によって測定し、性役割観との関連を検討した。調査対象は研究1の被験者と同じで、分析には性役割観の4タイプに選出された被験者の反応を用いた。調査内容は東(1979)の試作したPTVC(Projective Test of Vocation Choice)の一部と、筆者が新たに作成したものを含めた4種の対象(父親, 母親, 恋人, 友人)×4つの志向性(家庭促進, 仕事促進, 就職促進, 就職抑制)の計16場面からなる調査GRTで、P-Fスタディに類似している。

自己性役割観のタイプとGRTの反応を検討したところ、mF型、MF型は家庭志向でmf型、Mf型は仕事志向といったように、家庭促進—仕事促進への賛成率は女性特性の重視の程度によって有意な差がみられたのに対し、就職促進—就職抑制への賛成率の違いは男性特性の重視の程度(mf型, mF型—Mf型, MF型)によっていた。また対象別にみると、恋人に家庭を促されるとどのタイプでも賛成率が高くなる傾向がみられたが、就職抑制に関してだけはタイプ、対象に関係なく反対が多く「一度は就職しなくては」という姿勢が大勢を占めていた。次に社会から期待される女性役割認知のタイプとGRTの反応では、伝統的女性役割期待(mF型)と同じくらいにMf型的女性役割期待を認知する女子大学生が多く、予想外の結果であった。しかもMf型は男性特性を重視した女性役割期待を認知する反面、GRTでは家庭促進や就職抑制に賛成する保守的な意見を持つ者が少なくなかった。社会では男性特性が重視されていることはわかっているが、自分自身は男性特性を発揮して仕事のうでで活躍することはできないし、その意欲もない、家庭を最も重視していきたいというパターンが多いことが示唆された。

討 論

本研究で作成したGRスケールは、小倉の提唱した8次元モデルとは直接結び付かなかったが、性役割観を様々な側面からとらえる必要性を示唆している。これまでの性役割スケールでは、どの側面に関する特性語かは考慮されずに性役割識別度の高いものだけが選ばれたため、女性特性のpositiveな面(『あたたかさ』=家庭的・母親的特性)は他の低い評価の側面に吸収されてしまっていた。しかし本研究ではあらかじめいくつかの側面を設定して特性語を収集することにより、女性特性の中でも重視される側面があることを明らかにした。GRスケールを性役割スケールとして用いるためには、男子青年における性役割観の因子構造を検討することが今後必要であろう。

投影法によって測定された志向性については、女子大学生の志向性は安定したものではなく、対象(特に恋人)の意見によって影響されることが示唆された。また性役割観との関係では、これまで言われてきたような伝統的女性役割期待に反発する女子大学生だけでなく、キャリアを持つことへの社会の期待を意識しながら、自分自身は強い家庭志向を持った女子大学生がいることも示唆された。